

ハンセン病をめぐる人権 絵画が語る「生きた証し」

「まるで絵が光を放っているように感じた」

熊本県にある国立療養所菊池恵楓園内の絵画クラブ「金陽会」。その作品保存活動に尽力されているキュレーター（美術品や芸術作品を鑑定し、展覧会などを企画する専門職、学芸員）の藏座江美さんは、初めて作品を観た時の印象をそう表現しました。

藏座さんと金陽会の出会いは約20年前。熊本市現代美術館の学芸員時代にハンセン病に関する展示の担当になり、初めて訪れた菊池恵楓園で、入所者で構成されている絵画クラブを知りました。

「実は私、ハンセン病については



「ふるさと、天草に帰る」展
会場（上天草市）で
子どもたちに説明をする藏座さん

ほとんど知らなかったんです。仕事で関わることになって勉強し、この社会が犯してきた人権侵害の事実、知らずにいた自分にもショックを受けました。初めて金陽会の作品を見に行く際には、入所者の気持ちを考えて、きつと恨みや怒りのこもった暗い作品が多いだろうと予想していましたが実際は、豊かな感性にあふれて輝くような作品ばかり。感動すると同時に、自分が想像していた作品のイメージ自体が、作者に対する偏見だったことに気づかされました」

その後、藏座さんは2016年、美術館を退職し本格的に金陽会作品保存活動に取り組むことに。その原動力は、焦りにも似た感情だったといいます。

「入所者の高齢化が進み、金陽会のメンバーも一人また一人と亡くなっていく中で、作品をご遺族が引き取られない場合は焼却処分されると聞いたことがありますので、絶対にこのまま光の絵画たちを埋もれさせてはいけません、とにかく行動しないともう時間が無い、その一心でした。現在、金陽会で活動しているのは発足時からのメンバーの吉山安彦さん（93歳）だけです。長い隔離生活の間に吉山さんが保管してきた金陽会作品は300点を超えます。よく誤解されますが、全ての作品に強いメッセージなどが込められているわけではありません。むしろ日常の一コマを切り取ったようなものの方がずっと多いんです。そんな作品一つ一つに、皆さんがそこで生活してきた現実、生きた証しが詰まっていると感じます。展覧会で作品を観た方々が、自分の中に沸き上がった思いを誰かと共有できる、そうした場をつくりたくて私は活動を続けているのかもしれない」

これからも多くの人に作品を観てもらいたい、まずは展覧会100回が目標と笑顔で意気込まれる藏座さん。

「同じ絵でも、観る人で解釈が変わります。特に子どもは、私たち大人とは全く違う視点から絵を捉え



「陽だまり」吉山安彦（1991）

るなど、その感受性の豊かさについても驚かされます。

『教わったこと』は年月とともに記憶から流れていっても、『感じたこと』は自分の一部となっていていつまでも残ると私は思っています。絵を観て、描かれた背景を知って、そして感じていただきたいです」

— 金陽会作品展 — 『知らない』を観に行こう。vol.10

ハンセン病は「らい菌」による感染症で、適切な治療で完治します。日本では、1996年の「らい予防法」廃止まで約90年間、国の誤った政策により患者は全国の「療養所」へ強制隔離されました。この政策により、患者も残された家族も厳しい偏見・差別に苦しみました。入所者は皆治療していますが、根深い偏見・差別などにより現在も外での生活が難しい状況です。

絵画を通して今なお続くハンセン病問題を考えてみませんか。

● 期間 2月28日(火)～3月12日(日)

● 会場 3月4日(土)藏座江美さん講演会

● 会場 2月11日の郷
※参加無料。詳細はチラシや八女市HPを参照ください。

